

# 老年期における発達心理学的諸問題

## The issues of the developmental psychology in the olds.

落合正行・石王敦子

Masayuki Ochiai & Atsuko Ishio

### Abstract

We have faced the very difficult situations concerning to the olds at present in Japan. One of them is the coming of advanced aged society. We will be able to find the problem solving method by examining the developmental psychological properties of the olds.

The situation of the advanced aged society were composed of the mainly two factors, the extend of average life accompanying to the reduced mortality rate, and the augmentation of the population over 65 age and the declining birth rates. In fact, the period of the olds was prolonged in spite of the shorter period of the healthy life expectancy which showed the period of no limitation of one's daily life.

There were many psychological problems concerning the olds, We examined the the understanding the olds, the old age periods as the developmental task, the conscience of the old, the influential effects from the perceptual change, the personality properties of the old which were recognized as the consequence of the responses to the deprived situations in the olds, identity integration of the olds, the development of the wisdom, successful aging, super-aging period, the transcendence of the super-aging period, the acceptance of his or her own death, the support of the life skill for the olds. We should be able to construct of the good advanced aged society in considering them.

**Key words** : advanced aged society, the developmental psychological properties of the olds, successful aging, the transcendence of the super-aging period, the support of the life skill

### はじめに

現在、日本の社会においても、また世界においても困難な状況が発生している。いつの時代でも、困難な問題は生じてきている。今日の困難な問題のひとつは、高齢社会の到来であろう。ここでは、高齢社会における日本の現状、また発達心理学的な高齢者の特徴を検討することで、高齢社会をどのように意味のある形で構築するかに関する情報の提供を目指す。

### 1 老年期を取り巻く状況

平成24年版高齢社会白書によると、高齢化の要因は大きく分けて、①平均寿命の延伸と死亡率の低下による65歳以上人口の増加と、②少子化の進行による若年人口の減少の2つと考えられる。

実際、日本の総人口は2011年10月1日現在、1億2,780万人で、そのうち65歳以上の高齢者人口は過去最高の2,975万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）も23.3%（前年

23.0%) となったという。

経年的にみると、日本の65歳以上の高齢者人口推移は1950年には総人口の5%に満たなかったが、1970年に国連の高齡化社会の定義水準である7%を超え、さらに1994年には高齡社会の基準であるその倍化水準である14%を超えた。そして、高齡化率は上昇を続け、現在、23.3%に達しているという。この傾向は、総人口が減少するなかで高齢者が増加することにより高齡化率は将来に渡り上昇を続け、2013年には高齡化率が25.1%と4人に1人となり、2035年に33.4%と3人に1人となるという。2042年以降は高齢者人口が減少に転じても高齡化率は上昇を続け、2060年には39.9%に達して、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されている。そして、65歳以上の高齢人口と20～64歳人口（現役世代）の比率は、昭和25（1950）年には1人の高齢人口に対して10.0人の現役世代がいたのに対して、平成22（2010）年には高齢者1人に対して現役世代2.6人になっている。今後、高齡化率は上昇を続け、現役世代の割合は低下し、72（2060）年には、1人の高齢人口に対して1.2人の現役世代という比率になるという。この事態は、これまで経験したことのない人口構成の社会が到来するということであり、これまでの社会の在り方を根本的に見直し、その準備を早期にする必要性を示唆しているといえる。

高齡化は地域により異なることが知られているが、都道府県別では、2011年の高齡化率は、最も高い秋山県で29.7%、最も低い沖縄県で17.3%となっており、2035年には最も高い秋山県では41.0%となり、最も低い沖縄県でも27.7%に達すると見込まれているという。この様に、高齡化率はすべての都道府県で上昇すると見られる。

世界の動向については、2010年の世界の総人口は68億9,589万人であり、2060年には96億

1,519万人になると見込まれているという。総人口に占める65歳以上の人の割合（高齡化率）は、1950年の5.2%から2010年には7.6%に上昇しているが、さらに2060年には18.3%にまで上昇すると見込まれており、今後半世紀で高齡化が急速に進展することになるという。

一方、出生数は減少を続け、2060年には48万人になると推計されている。この減少により、年少人口（0～14歳）は2046年に1,000万人を割り、2060年には791万人と、現在の半分以下になると推計されている。そして、出生数の減少は生産年齢人口（15～64歳）にまで影響を及ぼし、2060年には4,415万人となると推計されている。

平均寿命は、2010年で男性79.64年、女性86.39年であるが、今後男女とも延長され2060年には男性84.19年、女性90.93年となると見込まれている。このことは、高齡期が長くなることを示している。一方、日常生活に制限のない期間である健康寿命については、2010年で男性70.42年、女性73.62年である。平均寿命と健康寿命には、男性で9歳、女性で13歳ほどと大きな差があることが分かる。

65歳以上の高齢者の生活で、子どもとの同居率は1980年にほぼ7割であったものが、1999年に50%を割るというように、単独世帯の割合が上昇し続け、2030年には37.7%となる見込みという。65歳以上の高齢者のいる世帯は2010年で世帯数は2,071万世帯で、全世帯（4,864万世帯）の42.6%を占め、高齢者のいる世帯は増え続けているという。65歳以上の高齢者のいる世帯についてみると1980年では世帯構造の中で三世代世帯が一番多く、全体の半分程度を占めていたが、2010年では夫婦のみの世帯が一番多く3割程度を占めており、単独世帯と合わせると半数を起える状況であるという様に、三世代世帯は減少傾向である一方、単独世帯は増加傾向にある。

一方、65歳以上の高齢者について、どももとの同居率は1980年にほぼ7割であったもの

が、1999年に50%を割り、2010年には42.2%となっており、こどもとの同居の割合は大幅に減少している。一人暮らし又は夫婦のみの世帯については、ともに大幅に増加しており、1980年には合わせて3割弱であったものが、2004年には過半数を超え、2010年には合わせて54.0%まで増加しているという。

高齢者の心の支えとなっている人については、配偶者あるいはパートナーを挙げる人が3分の2近く(65.3%)おり、また子どもを挙げる人も6割近く(57.4%)となっている。上記の同居との関係では、老年期の心の支えのひとつである子どもの同居率は減少しており、現実には望むとおりでなくなっている。

高齢者の経済状況は、公的年金・恩給が総所得の70.2%で最も多く、次いで稼働所得(17.3%)であり、60歳以上の高齢者の暮らし向きについて心配ないと感じている人の割合は全体で71.0%であるという。

65歳以上の高齢者の健康状態についてみると、2010年における有訴者率(人口1,000人当たりの「ここ数日、病気やけが等で自覚症状のある者(入院者を除く)の数)は471.1と半数近くの人が何らかの自覚症状を訴えているという。

65~74歳と75歳以上の被保険者についてそれぞれ要支援、要介護の認定を受けた人は1.2%、要介護の認定を受けた人が3.0%であるのに対して、75歳以上では要支援の認定を受けた人は7.5%、要介護の認定を受けた人は21.9%となっており、75歳以上になると要介護の認定を受ける人の割合が大きく上昇するという。

一方、労働力人口数に占める65歳以上の人の比率は、1980年の4.9%から8.9%と大きく上昇しているという事から、65歳以上で働く人の数は増えてきていることを示している。

上記のように、高齢者を巡る状況は、国の施策を揺るがす問題でもある。

ここでは、高齢社会における問題解決のために、老年期における心理学的問題について検討する。老年期における心理学的問題は様々あるが、ここでは主として発達心理学的観点から以下の点について検討する。

### 老年期の理解

国立長寿医療センター(2004)の20代~70代の男女2025名を対象に行った調査によれば、「高齢になることに不安がある」と答えた人は85%、「長生きしたいと思わない」と答えた人が41%にのぼっていたという。多くの人が高齢者をどちらかというとながティブにとらえていることが分かる。問題は、なぜこの時期がネガティブにとらえられるのかである。

秋山・長田(2003)はこれから高齢期を迎える更年期女性に対して老年期のイメージを調べているが、「暗い」と回答した者が40.5%、どちらとも言えない」と回答した者が49.3%と最も多く、約半数は中立的な老年期イメージを持っていることがわかる。そして、「やや明るい」と「明るい」と回答した者が10.2%であり、更年期女性の老年期イメージは、中立的かあるいは暗いイメージをもっていることが示されている。

落合(1997)は、大学生に対して発達の時期を示す言葉に対する連想反応を分析した。老年期に関しては、老人、年より、おじいさん、おばあさんの4語を刺激語として用いたが、年よりに対する心情反応のみが否定的な評価(56%)であった。しかし、中年を除いては、他の発達時期を示す語に対する連想反応語のうち、心情反応を見ると中年以外は否定的評価はなかったことを考えると、年寄りに対する反応は象徴的でもある。

田仲・日湯・齋藤(2012)らは、40歳から60歳の女性281名を対象に、老いの意識について検討した結果、年代による結果では、40代前半では精神的ゆとりや自己成長の意識とともに老いの気づきが生じ、40代後半では考

え方の深まりや多面性を感じる一方で、「身体・精神の衰え」の実感が最も高まっていた。それに対し、50代では衰えの意識は低下し、具体的な「生き方」の意識が高まることが示され、40代から50代にかけて意識変化が生じていることが示された。

この様に、老年期のイメージはネガティブなものであることがわかる。また、年齢により老いの受け入れが肯定的になる可能性のあることも示唆されている。人生の最終段階についてはそもそもの受け入れが困難な状況にあることが、うまく受容する在り方が、老年期の過ごし方と関係すると考えられ、重要な課題と言える。

それでは、老年期に関して発達心理学の知見はどのようなものであるのか、言い換えるとどのように理解されてきたのであろうか？

ここでは、この点について論を進めることにしたい。

## 2 老年期の発達心理学的特徴づけ

### (1) 発達課題から見た老年期

老年期に関して、これまで発達課題からの発達心理学的特徴づけが行われてきている。

例えば、Newman&Newman (1984) は、成人後期 (56歳~64歳) の発達課題として

1. 老化にともなう身体的変化に対する対応
2. 新しい役割へのエネルギーの再方向づけ
3. 自分の人生の受容
4. 死に対する見方の発達

をあげている。

Levinsonの成人期の発達の特徴は、60-65歳を老年期へ向けての生活設計の時期とした。

Havighurstは、60歳から後を成熟期ととらえて、

1. 体力や健康の衰えに適応していく
2. 退職と収入の減少に適応する

3. 配偶者の死に適応する

4. 自分と同年齢の人の集団にはつきりと仲間入りする

5. 社会的役割を柔軟に受け入れて、それに適応する

6. 物質的に満足できる生活環境をつくりあげる

という課題を挙げている。

しかし、Newman&NewmanやHavighurstは、対象としている年齢からも60歳を超えるころを老年期としており、研究者が問題とした時代背景の影響が問題であり、現実の社会とは必ずしも適合的ではない。

実際、老年期に対する理解の仕方が、最近大きく変化してきている。例えば、老年医学では65歳から74歳までを「前期高齢者」、75歳から84歳までを「後期高齢者」、85歳以上を「超高齢者」と呼び区別している。そして、それぞれの時期に違った特徴が見られる。

次に、このことを見ておこう。

### (2) 老年期の精神機能の発達の特徵

老人意識に関して、守屋 (1991) は、10年間の縦断研究からその発達の特徵について論じている。年をとったと感じることを老人意識ととらえ、初回調査時点での年齢が60歳から90歳までの170名 (男61名、女109名) を毎年追跡調査した。最終的には、7年間以上の追跡調査が出来た69名 (男20名、女49名) の結果を報告している。老人意識の形成過程が、1度出現するとそれが保持されるというのではなく、利き手の形成過程のように何度か出現と消失を繰り返し次第に永続性のある安定した老人意識へと変化するのではないかという仮説の検討を行っている。分析は、老人意識の有無のパターンを分析した。結果は、65名中36名が老人意識に交代現象が認められた。この交代現象が、絶対評価 (個人内相対評価) と相対評価 (個人間相対評価) の相対的優位が関与しているとし、交代現象は、絶

対評価でも相対評価でも老人意識のない状態から絶対評価でも相対評価でも老人意識のある状態に至る中間段階で見られる現象であるとしている。この様な、老人意識が交代するという発達心理学のひとつの発達現象を老年期でも呈することが認められている。また、老人意識が出現と消失を繰り返し次第に永続性のある安定した老人意識へと変化する事を確認している。

一方、加齢による知覚機能の変化の他の心理的影響については、権藤（2008）は視聴覚の低下が心理・生活面に与える影響として、①コミュニケーションの問題、②外出の減少や活動範囲の縮小、③対人ネットワークの縮小、④日常生活における自己効力感の低下、⑤抑うつなどを挙げている。このことは、知覚的機能の低下の影響が、老年期の生活上の行動に様々な制約を与えていること、そのことが老年期の行動特性を規定していることを示している。従って、知覚的機能低下の支援は、行動上の支援にもつながることが示唆される。

性格特徴に関して、進藤（2010）によると、これまで言われてきた高齢者の性格特徴である、自己中心、猜疑心が強く、保守性、心気性が高まるなどや、健康度の低下、経済的自立の困難、家族・社会での人間関係の疎遠、生活目標の喪失などから、不安、抑うつ状態、心気状態におちいりやすい等といった病的な点が強調されてきたが、これらは本来的なものではなく、高齢期に生じる剥奪的状况への反応や疾病が人格に及ぼす影響であるとの解釈がなされるようになったという。

実際、人格的特性の発達的变化と状況による人格的特徴との区別は事実を正確に判断する上で重要である。実際、進藤は下仲の東京都に住む百歳以上の高齢者82名の人格テスト結果研究を引用して、被験者の80%以上が身体的介助を必要としているにも関わらず、主観的な健康感の平均点は他の年代の高齢者よ

りも高く、状況に左右されない確固とした自己（はっきりした立場をとろうとする、よく考えて決める、自己充足している、などの特徴）、女性性人格特徴（思いやりがある、おだやか、子ども好き、話し方がやわらかい、など）、タイプB行動パターン（相手の話を終わりまで聞いている、せかされても焦らない、一つずつ片付ける、など）、積極性（全力を尽くす、一生懸命やる、けっして遅れない、競争心がある、など）といった特徴が見出されていることを指摘している。すなわち、ストレスの影響を受けにくく、精神的に活力があり安定した百歳老人の姿が示されたという。

深瀬・岡本（2009）によると、老年期のアイデンティティは、過去の体験に関連していること、配偶者を亡くすことや定年退職など、老年期の重要なライフイベントに主体的に取り組むことによって、アイデンティティの統合がみられることを指摘している。

進藤（2010）は、加齢の心理には、①衰えや喪失といった生の基盤を揺るがす側面と、②旧来の高齢者観ではあまり取り上げられて来なかった発展、超越的な側面、そして最後に③年を重ねても残る不変性の側面と異なる3つの層があるように思われるとしており、高齢者はさまざまな喪失体験の中で心細さと依存欲求をもっており、一方で尊厳ある精神の自立を可能にする活力も秘め、同時に若年の頃から変わらない等身大の思いももっているというように、この3つの層のどれもが現実であり、個人の中に共存していると理解している。

### (3) 老年期の心理的特徴としての知恵

老年期において優れた能力を発揮するものとして、Baltes, Dittmann-Kohli, & Dixon (1984) らは、知恵を挙げる。堀（2009）によると、Baltesらの知恵を人生にかかわる重要だが不確定なことからへの良き判断、人生

や生活の基本的なプラグマティクスの領域（人生設計、人生管理、ライフ・レビュー）についての熟達した知識をさすとし、人間の発達や人生に関することへの類いまれなる洞察、とくに人生上の困難な課題に対する適切な判断やアドバイスや見解という定義を行っている」と述べている。そして、Baltesらは、知恵を①豊かな宣言的知識（それは何であるか、どのようなことであるかなど、言語で表現することが可能ないわゆる知識）、②豊かな手続き的知識（熟練して身についた、順序立った行為や操作とその結果に関する経験的知識）、③文脈の理解、④価値相対化の理解、⑤不確実性の理解という5つの基準から測定している。そして、知恵は、選択的最適化と補償を通して獲得されるというのである。

#### (4) サクセスフル・エイジング論としての老年期

1980年代の中頃に、アメリカ社会ではサクセスフル・エイジングという言葉が登場する（Butler & Gleason, 1985）。この意味の一つは、老年期への社会的評価の反映と考えられる。このことは、老年期が社会において現実にもどのような存在であり、それをどのような姿へと変換するかという課題解決とも見てとれる。言い換えると、社会にとっても、個人にとっても元気で長生きすることは意味のあることだと考えられるが、それだけではなくこの基礎の上に老年期にある人の個人的必要性や望みや欲求の満足とともに、社会から期待されていることとの両方に答えることが意味のある事である。そして、これがサクセスフル・エイジングと呼べる姿と考えられる。もちろん、問題は社会的に期待されていることであり、老年期には職業上の定年、引退が起り、それまでの役割がなくなったり、またそれに代わる役割を果たすことが求められている。このような社会的な役割から離脱する事に適応する事が、離脱理論

（disengagement theory）と言える。しかし、離脱ではなく新たな役割の発見を主張するのが、活動理論（activity theory）である。

ところで、Baltes & Baltes（1990）は、生涯発達を獲得（gains）と喪失（losses）の混在したダイナミクスとしてとらえる。そして、堀（2009）によると

- 1 特殊化（選択）した適応の形態が、生涯発達の一般的な特徴として持続的に発展していくこと。
- 2 エイジングの生物的・社会的諸条件への適応が迫られる一方で、その可塑性が徐々に狭められること。われわれは、年をとるにつれて、生理的な機能の低下や社会的役割の減少への適応が迫られてくる。つまり喪失としてのエイジングという側面への適応が重要になってくる。
- 3 人生を統御し効果的なエイジングを達成するために、衰退の進行に対して、個人が選択的で補償的な努力をすること。高齢のタイピストが、タイピング・スピードの低下を補償するために先読みの技能を発達させることのように、サクセスフル・エイジングのためには、選択的な最適化を行う一方で、補償的・代替的な作用を発達させる必要がある。

というように、サクセスフル・エイジングの理論として、「選択的最適化とそれによる補償」の論が芽生えたという。

しかし、守屋（2006）は、Baltesのひとりの適応能力の『獲得／喪失』を基に高齢期が適応能力の喪失の比率が獲得の比率を上回る時期であり、獲得はあっても全体としてみれば「喪失の時期」として特徴づける考えに対して、生理的死と心理的死を区別している。そして、心理的死に関しては、心理的生とは獲得と喪失がバランスを保って展開するダイナミックな変化の過程、心理的死とはある時点の喪失によって崩れたバランスが獲得によって回復されないまま推移する状態だと考えた。

そして、ひとの発達過程で問題となるのは、どの時期にも起きる喪失／獲得のバランスの喪失であって喪失そのものではない、どの時期であろうと喪失を「喪失」と捉えて諦めるのではなく、バランスの回復の方策を具体的に考えさえすればよい、ある人の高齢期が現実的に「喪失の時期」としてあるとしたら、それは多くの場合、彼ら自身がその像を内面化し、内面化されたその像によって自己誘導された結果である、そして人々が心理的死に至るのは、失ったバランスを回復する余裕が与えられなかったり、その回復のための活動を妨害されるというような場合であり、そうでない限り失ったバランスは回復できると述べている。

更に、守屋（2006）は、生きるということは、他の人々との間で引き起こす大小さまざまな葛藤に向き合い、それを解決する過程だとし、人生で直面するさまざまな問題の解決過程で、ひとは状況や相手を変化させるだけでなく自己をも変えることで自らの発達を遂げる事から、ひとが重大な問題を解決する過程には、そのひとの心理的発達の諸側面が映し出されていると考え、回想法による人々が生涯において直面した問題の解決方法を検討している。そして、その特徴が、問題を根本的に解決する場合が少なく、次善の解決策が選択されることが多いという。実際、根本的解決の難しさは、回想にみる限り問題そのものに社会の伝統的仕組みや複雑な人間関係が絡んでいて、個人の能力や努力の範囲を超えることが多いことに起因しているという。そして、次善の策は次善にしか過ぎないため、そのことがさらに別の問題を生み、その新しい問題がその後の苦しみの原因となっているという。しかし、人々がその後時間をかけて（数十年を要することも珍しくない）自身の力でこの種の精神的負担から自己を解放する事を示している。

ところで、サクセスフル・エイジングはも

ちろん老年期に限ったことではない。基本的に、どの発達の時期においてもそれに相応しい社会的な自立が基本的な在り方と考えられる。事実、学校教育の目的は社会的自立の支援である。しかし、特に老年期には身体上の健康の保持、退職に伴う経済的困窮の回避、満足感の高い生活の維持が危機にさらされる時期でもある事から、サクセスフル・エイジングが問題となるといえる。

#### (5) 第3期と第4期の問題

Erikson（1950）は、発達の危機をもとに第8段階までの発達段階を設定した。この最終段階である第8段階は、老年期であり、統合の時期とした。その後、Erikson & Erikson（2000）は生涯発達の視点からこれまでのライフサイクルに新たに第9段階目の超高齢期を設定した。すなわち、Erikson・Erikson（1997）は、80歳代後半～90歳代を第9の発達段階にとらえ、この時期の課題として、身体能力の喪失、多数の近親者との死別、自らの死が近いことなどによって生じる自尊心と自信の崩壊や不安（心理的危機）にどう対処するかが重要な課題になるとしている。彼らは、超高齢期は多くの新たな困難や喪失体験、身近な人の死に遭遇し、自分自身の死がそう遠くないことを感じるが、これらの喪失を生き抜く基礎として、人生の出発点で獲得した基本的信頼感だという。そして、第9段階のさまざまな喪失を甘受することが可能な人は老年的超越に向かうというのである（1997）。

この第9段階が設定されるに至った経緯は、堀（2008）によるとBaltesは70歳から103歳までの高齢者516名に対して知的能力を中心とするベルリン・エイジング調査（Berlin Aging Study）で、①多くの認知能力の低下、②認知症出現の問題、③高齢期初期の能力の有意さも低下へのガードにならない、④身体能力と認知能力の関連性といった、60代・70

代を中心に言義論してきた知恵論では説明できにくい事象に直面し、80歳代以上の人生第4期の問題に目を向けるようになったというのである。

一方、Baltes (2003) は、人生第3期と第4期とを区分し、第3期が①平均寿命の延長、②身体的・精神的向上の可能性、③後続世代におけるポジティブな側面の増加、④認知的・情緒的残存能力 (reserves) の証拠、⑤情緒的知能と知恵、⑥主観的レベルでの適応能力 (self-plasticity) の高まり等に特徴化出来るが、第4期 (80代前半あたり以降) は、①認知能力の喪失 (loss) の事実、②認知症の問題、③全体的な適応機能の低下 (dysfunctionality) 等から、第4期の生物-文化的不完全さ (biocultural incompleteness)、脆弱性 (vulnerability)、予測不可能性 (unpredictability) を指摘している。この様なことが、第3期と第4期の区別の根拠となっている。

#### (6) 老齡的超越性

Erikson & Erikson (1997) は、寿命と高齡期の伸長から、老年後期の発達課題として、老齡的超越性を加えた。老齡的超越性とは、発達の失調的傾向を超越し、死への恐怖を超えて、未知の世界への通路を与えられることだという。高齡期における生活満足それ以前以前の物質主義的で合理的な考えから宇宙のかつ超越的な視点への変化として理解することが、超越性といえる。

死の受容は発達のどの年代にも存在する問題であるが、老齡期は物理的には死に直面している時期ともいえる。従って、死に関する意味づけは、生きる上でも大きな課題ともなる。

川島 (2005) は、高齡者の死についての意味づけの概念構造を整理した結果、死と死に逝く過程への怖れ、死後世界への肯定的な意味づけ、そして人生に対する無常観が概ね通

底していること、とくに家族の存在、身近な者の死、健康状態が大きく死の意味づけに関与していることを示唆している。

富澤 (2009) によると、Tornstamは量的研究を重ね老齡的超越を構成する次元として、万物の魂や宇宙との親交の感覚の増大である「宇宙的」次元、自己中心性の減少や自己超越などの「自己的一貫性」次元、表面的な関心の減少や一人を望むなどの「社会と個人の関係 (積極的な孤独)」の3つの次元や徴候を導き出しているという。その結果、宇宙的超越の兆候は成人期の中頃から年齢と共に増大し高齡期に最大の発達を迎えること、孤独を望む兆候は高齡期に最大を迎えるが、しかし成人期の前期にもっとも急激に発達すること、内的一貫性の兆候は青年期でスタートし、75-85歳で最大を迎えその後は平行に推移すること、などの兆候を明らかにしている (2003)。

中川 (2008) は、老齡的超越性を「物質的で合理的な世界観から、宇宙的で超越的な世界観への、メタ認識における移行」とし、この移行に伴い生活満足感が高まると仮定されているという。すなわち、高齡期になると壮年期における世界観や暮らし方とは質的に異なる世界観や暮らし方に変化するという。

老齡的超越に関する実証的研究に関して、中川 (2008) は高齡期におけるスピリチュアリティの発達理論と位置付ける一連の研究、活動理論と離脱理論との対立を止揚する試み、エリクソンの発達段階理論における第9段階であるという考えとして取り上げられてきたが、いずれの考えに関しても実証的研究が乏しいことを指摘している。

ところで、富澤 (2009) は老齡的超越をライフサイクル第9段階としてとらえる立場から、実証的研究を行っている。彼女は、奄美群島内の2町村において自宅に居住する85歳から101歳までの超高齡者に対し、行動能力、心理的適応、老い観、老齡的超越項目等の質



問紙調査を実施し102人（性別：男性34.3%、女性65.7%）の回答を基にした結果を報告している。結果は、健康状況は「元気」と「普通」が全体の8割という状況であり、介護認定の状況は「認定者」52.9%、「認定外」47.1%で、介護度の重度の者は少ない状況にあったという。心理的適応状況については、現在の「生活満足度」を尋ねたところ、「大変満足」と「満足」を含めた「満足」は47.3%、「普通」は46.1%で、全体の93.4%が普通以上と回答しており、「老いた」感は77人（92.8%）でほとんどの人が感じているが、「孤独感」22人（26.8%）、「時間経過の遅さ」26人（32.1%）は4人に1人が感じている程度であった。「老年的超越」観の形成については、高い認識の項目は、「若い頃より心が穏やかになった」が82.7%（67人）で、次いで「亡くなった両親への愛情が増してきた」71.8%（57人）、「ささやかなことに幸せを感じる」70.4%（57人）、「過去のことを最近のように感じる」64.6%（51人）、「自分の全てを受け入れられる」61.7%（50人）、「離れた兄弟・子どもを近くに感じる」57.5%（46人）と続き、逆に極端に低い認識項目は「物やお金に対する興味がなくなった」26.8%（22人）であった。次に低かったのは「物思いにふけることに幸せ」43.0%（34人）、表面的な付き合いに関心がなくなった48.1%（39人）であった。

富澤によると、奄美群島の超高齢者を物質的・精神的に支えるのは家族の存在の大きさと、長生きをもっとも喜んでくれる人が「家族・親戚」であり、長生きの秘訣の筆頭に「家族が大事にしてくれる」をあげ、周囲との基本的信頼感のもとで、長生きの姿勢もポジティブであり、「寿命がくるまで」と「百歳は生きたい」という積極的意識となるという。また、奄美群島の超高齢者の特徴は昔からの馴染みのある地域で暮らすことが効用となって、超高齢期の生活をポジティブに維持している

ということである。それは居住年数の長さ、地域の愛着度の高さ、信頼の関係、子どもや地域との日常的な交流の豊かさである。これらは一人暮らしを成立させる要因ともなっているという。

百歳まで生きた長寿の方々の調査に関して、下仲（1997）は百寿者の性格を検討し、自己の健康は良好と考えており、不安感は少なく精神的に安定していること、他者をいたわり、明るく穏やかであり、マイペースである反面、几帳面であり、一生懸命行うという特徴をあげている。また、広瀬・鈴木（1999）によると、スウェーデン、イタリアの百寿者でも同様の傾向を示し、責任感が強い、リラックスしている、不安を感じない傾向、人生に満足しているという特徴が報告されているという。

広瀬・鈴木（1999）は、百寿者の研究をまとめて1）性差（女性は長寿であるが、QOLは男性の方がよい）、2）百寿者 paradox（凝固、ACE、PAI-1など心筋梗塞、血栓性疾患になりやすい多型性の不利な因子を持つ百寿者が多い）、3）分散が大きい（百寿者はかなり不均一な集団である）、4）栄養状態（QOLに大きな影響を与える、どの様な原因で低栄養になるのか）、5）サイトカインの変化（免疫、栄養状態、凝固亢進などに影響する可能性がある）、6）百寿者のデータは一般の高齢者疫学調査をもとに外挿した変化よりずれることがある（長寿のエリートである可能性）、7）外向的性格が多い（性格が寿命にどの様な機序で影響するか）、8）自律神経機能の評価、9）予備機能の評価（細胞から生体レベルの機能評価、負荷にたいする反応）、10）修復能（DNAから生体レベルでの傷害に対する修復能力）、11）代謝、内分泌の変化、12）psychosocialな観点とbiomedicalな観点を統合をあげている。

## (7) 老年期における支援：ライフ・スキルの支援

WHO精神保健部は、「ライフ・スキルとは、人とうまく付き合い、日常生活における苛立ち事や、ストレス等に対処できるスキルである。そのようなスキルは、心理・社会変化に対する適応能力を高めるのに非常に重要である」と説明している（川畑；1996b）。そして、そうしたライフ・スキルとして、「コミュニケーションのスキル」、「意志決定のスキル」、「問題解決のスキル」、「批判的思考」、「対人関係のスキル」、「自己主張」、「喜怒哀楽の情動に対処するスキル」、「不安、ストレス・マネジメント」をあげ、それらを活用することによって身体的・精神的健康を維持・促進し、社会問題たとえば「酒、煙草、薬物の乱用」、「不安、抑鬱」、「若者の妊娠、無防備な性行為」、「虐待」、「自殺」、「学校中退」の防止・予防にもなるとしている。この様な意味で、ライフ・スキルは老年期だけに意味を持つものではなく、早期にこの様なスキルの教育的働きかけが、最終的に老年期の支援にも意味を持つものと考えられる。

老年期は、今後ますます重要な課題となるが、老年期はそれまでの発達の経緯を受けてみられる発達段階でもある。従って、老年期に至る様々な心の発達の経過をより明確にすることが、老年期の課題解決に不可欠なこととなる。老年期における心理的特徴を制度上や法律上、施策に反映させること、言い換えると老年期の心理的特徴を中心にした考え方に基づく社会の在り方が求められる。

## 文 献

- 秋山美栄子・長田由紀子 2003 老年期イメージとメノポーズに対する女性の態度に関する研究 文教大学人間科学部人間科学研究 第25号 73-79.
- Baltes, P. B. 1997 On the Incomplete Architecture of Human Ontogeny: Selection, Optimization, and Compensation as Foundation of Developmental Theory, *American psychologist*, 52, p.371.
- Baltes, P. B. 1987 Theoretical Propositions of Life-Span Developmental Psychology, *Developmental Psychology*, 23, 611-626 (ポール・バルテス「生涯発達心理学を構成する理論的諸観点」(鈴木忠訳)東・柏木・高橋編『生涯発達の心理学1』新曜社, 1993, pp.173-204).
- Baltes, P. B., Dittmann-Kohli, F. & Dixon, R. A. 1984 New Perspectives on the Development of Intelligence in Adulthood, in Baltes, P. B. & Brim, O. G. Jr. (eds.) *Life-span Development and Behavior* (Vol. 6). Academic Press, pp.33-76.
- Butler, R. N. and Gleason, H. P. (eds.), (1985). *Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life*. Springer Pub. New York. (岡本祐三訳『プロダクティブ・エイジング：高齢者は未来を切り開く』日本評論社)
- Erikson, E. H. 1982 *The Life Cycle Completed*. New York W. W. Noeton. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. 1997 *The life-cycle completed: A review*, Expanded edition. W. W. Noeton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦雄訳 2001 ライフサイクル, その完結<増補版> みすず書房)
- 深瀬裕子・岡本祐子 2009 老年期の心理社会的課題に関する研究の動向と展望 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部第58号 207-213

- 権藤恭之 2008 生物学的加齢と心理的加齢. 権藤恭之編, 朝倉心理学講座 高齢者心理学, 朝倉書店, 東京, 23-40.
- 広瀬信義・鈴木信 1999 百寿者研究の現状と展望 日本老年医学会雑誌 36巻4号、219-228.
- 堀薫夫 2009 ポール・バルテスの生涯発達論 大阪教育大学紀要第IV部門第58巻第1号173～185頁.
- 川島大輔 2005 老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題 京都大学大学院教育学研究科紀要第51号、247-260.
- 守屋国光 1991 老年期の自己概念に関する縦断的発達研究－老人意識の形成過程に関する10年間の追跡調査－ 大阪教育大学障害児教育研究紀要、14、1-10.
- 守屋慶子 2006 中・高年期からの心理的発達－「適応」から「創造」へ－ 立命館文学, 1050-1066.
- 内閣府 政策統括官 2012 平成24年度版高齢社会白書
- 中川 威 2008 老年的超越理論に関する一考察：実証的研究と批判の動向 生老病死の行動科学. 13 P.93-P.102
- Newman, M. B., & Newman, P. R. 1984 Development through life: A psychosocial approach. 3rd ed.  
(ニューマン, M. B., & ニューマン, R. P. 福富護 (訳)(1990). 新版生涯発達心理学エリクソンによる人間の一生とその可能性第2刷川島書店)
- 落合正行 1997 大学生における発達時期を示す語の連想反応の分析 追手門学院大学人間学部紀要4 1-13
- 進藤貴子 2010 高齢者福祉と高齢者心理学 川崎医療福祉学会誌 増刊号 29-44.
- 下仲順子 1997 人格, 性格, 日本の百寿者 (田内久, 佐藤秩子, 渡辺努編). 中山書店, 東京, p122-130.
- 田仲由佳・日潟淳子・齊藤誠一 2012 中年期女性における加齢に対する意識の変化－閉経段階に着目して－ 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第6巻第1号85-91.
- 山下稔哉、盛岡のぞみ、金子宏明、田中マキ子、長坂祐二、林隆、小川全夫 2010 “語り”を通じた百寿者の支援 山口県立大学学術情報第3号〔大学院論集〕121-129. 219-227.